

ブラームス 《ドイツ・レクイエム》

《ドイツ・レクイエム》の初演は1869年。ブラームス(1833-97)は刻苦勉励の末、20年かけて作曲した「交響曲 第1番」を1876年に完成しているの、それよりも若き日の作品ということになる。もっとも本作の構想はずいぶん前に遡り、1850年代後半には着手していることから、相当に力を入れた作品だったのだろう。同時期に作曲した「ピアノ協奏曲 第1番」や「セレナード」を経て、オーケストラを用いた楽曲に習熟を深め、筆致もかなり自在になっており、例えば、第1曲「悲しんでいる人たちはさいわいである」では、ヴァイオリンなしという思い切った書法を用い、ヴィオラ、チェロ以下の中低弦のほの暗い音色が中心となって、テキストに即した雰囲気醸し出している。合唱の扱いもまた、「運命の歌」や「アルト・ラプソディ」を手がけていた頃とあって、こなれている。

「レクイエム」をはじめミサ曲の類というのは、それまで(その後も)通常はラテン語によるカトリック教会の典礼文に作曲したものだが、さすが宗教改革が起こったドイツに生まれ、ルター派の信徒でもあったブラームスは、聖書および聖書外の聖典のドイツ語訳から丹念にいくつかのテキストを選び、組み合わせて、7つの楽章からなる音楽に仕立て上げた(よって、《ドイツ・レクイエム》を直訳すると「ドイツ語によるレクイエム」となる)。そういう意味で異色ではあるが、やはりこの大曲は「レクイエム」と呼ぶに相応しいうえに、全編にわたりブラームスらしい響きと優しさが横溢する“一般の人間”のための慰めの音楽でもある。

第1曲からバリトン・ソロの入る第3曲にかけては、葬送的な苦悩に満ちた祈りの空気が漂うが、第4曲の優美な合唱で、にわかに関心が変わる。最後に完成した、ソプラノ・ソロ入りの抒情的な第5曲を経て、劇的かつ壮大な二重フーガをとまなう第6曲でクライマックスに達する。そして最後の第7曲の救いの調べと言葉が始まりの楽章と呼応しながら、静かに曲を閉じる。